

ローマ美術のエジプト趣味

—— 壁画にみるアウグストゥスのエジプト征服とその影響* ——

藤 沢 桜 子

Egyptomania in Roman Art:
Influence of Augustus' Conquest on the Wall Paintings

Sakurako FUJISAWA

*Graecia capta ferum victorem cepit.*¹
Horatius, *Epistulae* 2.1.156.

はじめに

初代ローマ皇帝アウグストゥス（前63-後14年）は、自身の『業績録』において「エジプトをローマ国民の領土に併合した」という短い一文を残している²。前31年、オクタウィアヌス（後のアウグストゥス）は、エジプト女王クレオパトラVII世および彼女と手を組んだかつての同僚アントニウスにアクティウム（ギリシア北西岸）の海戦で勝利し、翌30年、エジプトの首都アレクサンドリアを陥落させる³。アントニウスとクレオパトラは自殺し、またクレオパトラとカエサルの子カエサリオンも殺害されて、プトレマイオス王朝エジプトは滅亡した。オクタウィアヌスはこの勝利を記念してアクティウム付近に植民都市ニコポリス（勝利の都市）を建設し、アポロン神殿を拡張するとともに海神ネプトゥヌスと軍神マルスにも聖域を捧げた⁴。

本稿では、オクタウィアヌスによるアクティウム海戦での勝利を契機に流行したとされる「エジプト趣味」の壁画について数例ではあるが⁵、研究の現状をふまえながら紹介するとともに、邸宅や別荘に描かれたそれらの壁画にエジプト征服（広義にはエジプト支配）の影響、つまり公的な宣伝としてのメッセージが読み取れるのかどうか、それともエジプト征服とは切り離された流行であっ

*本稿は、古代世界研究会 西洋古代史サマーセミナー「支配と従属——今後の研究進展の手がかりを求めて——」（2014年9月21日、東洋大学）における発表内容に基づく。なお、2014年はアウグストゥス没後2000年にあたる。

- 1 「捕えられたギリシアは野蛮な勝利者を虜にした。」
- 2 『神君アウグストゥスの業績録』27.1: *Aegyptum imperio populi [Ro]mani adieci*. Cooley 2009: 92. 邦訳として、国原 1986所収。『業績録』に関しては、島田 2006も参照。
- 3 アウグストゥスの生涯に関しては、Galinsky 2005; *id.* 2012; Richardson 2012; Southern 2014などを参照。
- 4 スエトニウス『ローマ皇帝伝』「アウグストゥス」18.2. 邦訳として、国原 1986. 建設したニコポリスには、周辺住民を移住させた。Der Neue Pauly (DNP) 2000, s.v. “Nikopolis [3]” (Strauch, D.) も参照。
- 5 de Vos 1980は、ローマおよびカンパニア地方における「エジプト趣味」の壁画をカタログ化および分析した研究で、「エジプト趣味」の壁画研究における基本文献である。

たのか、暫定的ではあるがあらためて考察を加えてみたい。

ローマ美術において「エジプト趣味」、あるいはエジプトに関わる装飾はオクタヴィアヌスによる征服よりも前の時代、またその後の時代にもみられるが、彼は公的な宣伝に視覚表現を巧みに利用した人物として知られており⁶、また壁画の作例は後79年にヴェズヴィオ火山の噴火で埋没したポンペイなどの火山周辺地域に多く残存することから、本稿の対象年代をアウグストゥス時代前後に限定する。

「エジプト趣味 Egyptomania」とは、西欧の美術や文化において繰り返して高まった古代エジプトへの関心を定義づける用語で、19世紀および20世紀初頭に古典古代の研究者たちがローマ帝政時代におけるエジプトの宗教や美術の人気と関連づけてもちいたところから普及していった⁷。この流行現象を表現するうえで適切であるのか否かはともかくとして、この用語は現在でも広く用いられており⁸、「エジプト趣味」をタイトルに冠した展覧会も各地で開催されている⁹。

ローマ美術において、エジプトに関連する製品はエジプト製であるのか否かによって「エジプトの Egyptian」または「エジプト的な、エジプト風の Egyptianizing」ともちいる表現にも差異がある。しかし、この二元論的な基準で判断した場合、イタリア製のものはエジプト製のものより劣っているという先入観を伴うことにもなってしまう、最初から区別していたがために、古代ローマ人が実際にはどのようにそれらの製品をみていたのかという肝心な問題がなおざりにされてしまう危険性のあることが指摘されてもおり、エジプトらしいものすべてを表現する意味で「アエギュプティアカ *Aegyptiaca*」という用語がもちいられる場合もある¹⁰。二元論的な基準では、ローマ壁画における「エジプト趣味」の作例はすべて「エジプト的、エジプト風」ということになる。エジプト製であるのか、そうでないのかといった区別自体が不必要であるため、本稿ではその点で用語にこだわることなく、それらの作例について述べる際に「エジプト装飾」「エジプト・モチーフ」といった表現もあわせてもちいることとする。

1. エジプト征服の公的な視覚化

1-1. ワニの貨幣

オクタヴィアヌスがアントニウスとクレオパトラに勝利すると、前29年、クィリヌス丘のヤヌス神殿の扉が閉められた¹¹。この勝利によってローマ国家に平和がもたらされたことを示す行為である。古来より、ヤヌス神殿の扉が開いていれば国家が戦時であることを示し、閉じていれば平和で

6 Zanker 1987など。

7 Curran 1996. 古代から20世紀までの西欧における「エジプト趣味」に関しては、Lupton 2012も参照。独語 *Ägyptomanie*; 仏語 *Égyptomanie*; 伊語 *Egittomania*。

8 例えば、Elsner 2006では、引用符を付したうえで“Egyptomania”が小項目名として登場するが、本文中にこの用語はみられない。

9 例えば、“Egyptomania: Egypt in Western Art, 1730-1930”(1994-1995年、ルーヴル美術館など)；“Roman Egyptomania”(2004-2005年、ケンブリッジ大学、フィッツウィリアム美術館)；“Egittomania: Iside e il mistero”(2006-2007年、ナポリ国立考古学博物館)。

10 用語の定義に関しては、Swetnam-Burland 2007を参照。なお、エジプトの、またエジプト的な彫刻等に関しては、Roulet 1972も参照。

11 リウィウス『ローマ建国以来の歴史』1.19.3. 邦訳として、岩谷 2008；『業績録』13. Cooley 2009: 159-160。

あることを示した。ここにローマの平和が象徴的に、また視覚的に告げられたのである。

この勝利、つまりエジプト征服をエジプトの象徴物とともにローマ国民に視覚的に示した例としては、まず、前28年に鑄造されたオクタウィアヌスのデナリウス銀貨がある(図1)¹²。表面には向かって右向きのオクタウィアヌスの頭部が表わされ、頭部の左右に CAESAR COS VI(カエサル[カエサルの養子となったオクタウィアヌスのこと]、コンスル[執政官]第6回)の銘文がある。後頭部とカエサル銘の間には、彼がト鳥官の聖職にあることを示す頂部が渦巻状の杖リトゥウスがある¹³。彼が第6回目のコンスル職に就任したのは、前28年である。また、裏面にはワニの全身像が右向きに表わされ、その上下に AEGVPTO CAPTA(エジプトが征服されて)の銘文がある。ワニはナイル河に生息する動物の代表であり、エジプトを象徴している¹⁴。それを上下から挟む銘文は、あたかもワニが捕えられた様子を示しているかのようでもある。

エジプト征服の翌29年、オクタウィアヌスが戦利品を携えてローマに帰還すると、アクティウム、アレクサンドリア、さらにこれらに先立つ前34年のダルマティア地方(アドリア海東岸)における勝利を祝して凱旋式が挙行された¹⁵。エジプト征服を記念するこの銀貨は、その翌年に鑄造されている。銀貨鑄造の翌前27年、オクタウィアヌスは元老院より「アウグストゥス(尊厳者)」の称号を受ける¹⁶。同年、表面に彼の頭部、裏面に同銘文とワニの像がついた金貨も鑄造されている¹⁷。

「エジプト征服 *Aegypto capta*」銘の貨幣の場合、表面ではオクタウィアヌスの肖像と銘文によって、主体となる人物と年代が示され、裏面ではワニと銘文が組み合わさることによって、起きた出来事が明解に伝えられている。より説明的な役割を果たしているといえるのは、植民都市ネマウス *Colonia Augusta Nemausus*(現フランス、ニーム)の貨幣である¹⁸。表面ではアウグストゥスと彼の右腕アグリッパの頭部が表され、裏面では、銘文が植民都市名となっているものの、鎖につながれたワニが勝利の象徴であるシュロの葉とともに表わされている。ワニの描写は《ナイル河風景モザイク》(イタリア、パレストリーナ、前2世紀末～前1世紀初頭)などにみられ¹⁹、ローマ人がこの動物の像を目にした際、エジプトを容易に連想できたのかもしれない。エジプトの象徴としてワニの図像が選択された背景には、すでにクレオパトラがアントニウスとの娘クレオパトラ・セレネの象徴としてワニの図像を貨幣にもちいていたこと、またプトレマイオス王朝では初代プトレマイオス I 世よりワニ頭のエジプト神ソベクの信仰が篤かったことが指摘されている²⁰。ワニは、プトレマイオス王朝が支配していたエジプトの象徴であったのかもしれない。

12 *Roman Imperial Coinage (RIC)* 1, 271a. 大英博物館、所蔵番号1860, 0328.114. 他に *RIC* 1, 545: CAESAR. DIVI. F. COS. VI.

13 オクタウィアヌスは、前43年以前にト鳥官 *augur* に選ばれたようである。Gurval 1998: 112.

14 例えば、Boatwright 2012: 115; Herklotz 2012: 18.

15 スエトニウス『ローマ皇帝伝』「アウグストゥス」22など。凱旋式に関しては、Gurval 1998: 25; Richardson 2012: 75-76.

16 『業績録』34.

17 *RIC* 1, 544. 大英博物館、所蔵番号1897, 0604.4.

18 例えば、前9/8-3年頃鑄造のデュボンディウス真鍮貨：フィッツウィリアム美術館、所蔵番号CM.69-1948. 美術館HP: <http://data.fitzmuseum.cam.ac.uk/id/object/193973> (2014年9月8日接続); Ashton 2004: 12-13, cat. no.2.

19 《ナイル川風景モザイク》に関しては、Meyboom 1995などを参照。

20 Draycott 2012. 「エジプト征服」の貨幣には、同銘文とともにカバを表わした例(*RIC* 1, 546)もあるが、その真贋性自体が問われている。

1-2. オベリスク

首都ローマにおける大規模で公的な記念碑として挙げられるのは、前10年にアウグストゥスがエジプトから首都ローマに運ばせた2本のオベリスクである²¹。ローマには古代のオベリスクが13本現存するが、これらの2本はオベリスクとしても、またアスワン産赤色花崗岩の石材としてもローマにもたらされた最初のもので、現在、フラミア街道の出発点であるポポロ広場と下院議事堂として使用されるモンテチトリオ宮前の広場にそれぞれ立っている。その高さは前者が約33メートル²²、後者が約22メートルで、運送のために専用に建造された船がプテオリ(現ポッツオリ)の港に着くと、それを見た人々は目を見張ったという²³。街道名にちなんで《フラミニオのオベリスク》と呼ばれるポポロ広場のオベリスクは、第19王朝セティ I 世(在位 前1294-1279年)とその息子ラムセス II 世(在位 前1279-1213年)の命によって「太陽の都」ヘリオポリス(現カイロ近郊)で建立されたもので²⁴、ローマではキルクス・マクシムス(大競走場)のスピーナ(中央の分離帯)に立てられた。また《モンテチトリオのオベリスク》は、第26王朝プサメティク II 世(在位 前594-589年)によって同じくヘリオポリスで建立されたもので、ローマではカンパス・マルティウス(マルスの原)のアウグストゥス墓廟付近につくられた日時計 *Horologium Augusti* または *Solarium Augusti* の指時計としてもちいられた。

これらのオベリスクの台座には同文で、「インペラトル(最高指揮官)、カエサル、神の息子アウグストゥス、大神祇官、インペラトル歎呼12回、コンスル第11回、護民官職権第14回は、エジプトをローマ国民の支配下においたので、贈り物[オベリスクのこと]を太陽神ソルに捧げる」という碑文が刻まれている²⁵。アウグストゥスが最高の聖職である大神祇官に選ばれたのは前12年であり、碑文の職権回数にあったのは前10年にあたる。前31-30年におけるアクティウムおよびアレクサンドリアでの勝利から20年経過しているものの、これらのオベリスクがエジプト支配を記念してローマにもたらされたのは明らかであり、エジプトで制作されたオベリスクそのものが視覚的にエジプトの象徴となっている。オベリスクはエジプト征服の戦利品でもあった²⁶。

エジプトは他の属州と異ってアウグストゥス以来、皇帝個人の所有となっていた²⁷。《モンテチトリオのオベリスク》の場合、アウグストゥスとの関連性はさらに強く、アウグストゥスを記念する《平和の祭壇(アラ・パキス)》および《アウグストゥス墓廟》と併せてカンパス・マルティウスの一部を形成していたとみられる²⁸。現在、テヴェレ川岸に移築されているが、当初は日時計と隣接し

21 ポポロ広場とモンテチトリオ広場のオベリスクに関しては、おもに以下を参照。Swetnam-Burland 2010; *ead.* 2012; Davies 2011; Gregory 2012.

22 重さ235トン。ハバシュ 1985: 140.

23 プリニウス『博物誌』36.70. 邦訳として、中野 1986. なお、プリニウスは、それぞれのオベリスクの高さおよび最初の建造者であるエジプト王たちの名を取り違えている。Swetnam-Burland 2010: 142-143.

24 ヘリオポリスに関しては、DNP 1998, s.v. “Heliopolis, Heliupolis [1]” (Seidlmayer, S.) も参照。

25 *Corpus Inscriptionum Latinarum (CIL)* 6.701-702: Imp(erator) Caesar divi f(ilius) / Augustus / pontifex maximus / imp(erator) XII co(n)s(ul) XI trib(unicia) pot(estate) XIV / Aegypto^(sic) in potestatem / populi Romani redacta / Soli donum dedit.

26 Swetnam-Burland 2010; Davies 2011: 381.

27 タキトゥス『年代記』2.59; 『同時代史』1.11など。それぞれ邦訳として、国原 1981; 同 1996. アウグストゥスとエジプト併合に関しては、おもに Herklotz 2012を参照。

28 Favro 2005: 258は、《アウグストゥス墓廟》《平和の祭壇》およびエジプトのオベリスクによって、

ていた《平和の祭壇》は、前13年の元老院決議により、アウグストゥスがヒスパニア（現スペイン）とガリア（現フランス）で治めた勝利を記念して建設が開始され²⁹、前9年に奉獻式が行われている。年代的に近いため、両者の建設は計画的であったようである。指時計オベリスキの影は、祭壇も指し示していた³⁰。また、《アウグストゥス墓廟》は前28年より建設が開始され、後継者候補であった甥のマルケッルスが死没した前23年までには完成されたとみられる³¹。この墓廟建設にあたっては、アウグストゥスはエトルリアの墳墓や、なかでもアレクサンドリアに建てられたアレクサンドロス王の墓廟の存在に影響を受けていたようである³²。実際、アウグストゥスはエジプト滞在期間中に彼の墓廟を訪れており³³、ファラオたちの支配していたエジプトを征服し、自身の名にちなんで首都アレクサンドリアを築いた王としてのアレクサンドロスを強く意識していた³⁴。

アウグストゥスはイタリアにおいてはあくまでも「元首 *princeps*」であることに固執したが、エジプトでは伝統的な王としての地位を受け入れ、エジプトの神殿ではファラオとして、それもエジプトの神々に捧げ物をする姿で描写されており、ここに彼のエジプト支配に対する巧妙な政策の柔軟性がみてとれる³⁵。ファラオは、イシスとオシリスの息子ホルスと同一視されており、アウグストゥスもそれを受け入れた。ローマに立つ《モンテチトリオのオベリスキ》と《フラミニオのオベリスキ》は、ラテン語碑文にも明らかなように確かにエジプト征服を記念したものであるが、かつてのエジプトのファラオたちがエジプトの神々に奉獻した記念碑でもあり、そこに政治的にも宗教的にも最高位に立ったアウグストゥスがファラオを意識して彼の立場を可視化したものとみなすこともできるという³⁶。《アウグストゥス墓廟》の正面両側にオベリスキが建立されたのも、やはりオベリスキが単にエジプト征服の記念ではなかったからなのかもしれない³⁷。

エジプトでは、王に即位するとオベリスキを神殿に建立して神に奉獻する伝統があった。プリニウスは、オベリスキは太陽光線の象徴であり、エジプト王たちがそれらを太陽神に捧げたと述べている³⁸。アウグストゥスもこれらのオベリスキをイタリア古来の太陽神ソルに捧げており、この点に

アウグストゥスがローマにもたらした永続的な安定、平和と繁栄、軍事的な成功を具現化しており、フラミニウス街道の東端にあるキャンパス・マルティウス全体が洗練された安逸な場所となっていたとする。Rehak 2006は、キャンパス・マルティウス北部のアウグストゥスに関連する一連の複合体に彼の火葬場も加えて考察している。

29 『業績録』 12.2.

30 オベリスキ指時計の影は、日時計遺構の発掘者ブフナーによる1979年の論文発表以来、アウグストゥスの誕生日であり秋分の日である9月23日に《平和の祭壇》に落ちるという説が有力であったが、近年ではこの説は否定されており、いずれの日でも夕刻には影が祭壇の方角を示していたとされる。《アウグストゥスの日時計》に関する研究に関しては、Rehak 2006: 82-85; Heslin 2007を参照。

31 Davies 2000: 50.

32 Davies 2000: 51-6.

33 アウグストゥスによるアレクサンドロス墓廟の訪問に関しては、スエトニウス『ローマ皇帝伝』「アウグストゥス」18.1やカッシウス・ディオ『ローマ史』51.16.5の記述がある。

34 Herklotz 2012: 13. Swetnam-Burland 2010は、オベリスキに刻まれていたエジプト王たちの碑文の内容や図像も考慮されていたとする。

35 Boatwright 2012: 120-121; Herklotz 2012: 14.

36 Herklotz 2012.

37 《アウグストゥス墓廟》にあった碑文のない2本のオベリスキは、現在、サンタ・マリア・マッジョーレ教会前のエスキリーノ広場とトリニタ・デイ・モンティ教会前のクリナーレ広場に立っている。2本のオベリスキに関しては、Swetnam-Burland 2010などを参照。

38 プリニウス『博物誌』 36.64.

もエジプト王の伝統の影響がみられるとともに、征服したエジプトの太陽神への奉献物をローマの太陽神に奉献することでエジプト神がローマ化され、オベリスクがまさにローマ人の戦利品となったとされる³⁹。太陽神とアウグストゥスとの結びつきは強く、スエトニウスは、アウグストゥスの生誕にまつわる逸話のなかで、彼が太陽神アポロの息子とみなされたと伝えている⁴⁰。アポロ神はアウグストゥスの守護神であり、神に対する彼の信仰は篤く、パラティヌス丘にあった彼の所有地にもアポロ神殿を建設している⁴¹。また、彼自身が自分をアポロ神と同一視していたという⁴²。

1-3. ケスティウスのピラミッド墓

公的な記念物ではないものの、《ガイウス・ケスティウスのピラミッド墓》は、アウグストゥス時代のローマにおける「エジプト趣味」の代表的な作例としてしばしば挙げられる⁴³。高さ約36メートルの威容を誇るこの墓は、後3世紀に皇帝アウレリアヌスによって建設された城壁に組み込まれたが、創建当初は独立した建造物であり、オステティア街道からローマ市内に入る手前にそびえていた⁴⁴。被葬者ケスティウスは、プラエトルや護民官、また饗宴担当七人委員の公職を歴任した人物で⁴⁵、相続人の一人にマルクス・アグリッパがいた⁴⁶。被葬者の正確な没年は不明であるものの、アグリッパが前12年に死去していること、また、豪華な副葬品を墓に入れられなかったことを伝える肖像台座の碑文の内容がアウグストゥスの奢侈禁止令 *lex Iulia sumptuaria* (前18年) と関連している可能性があることから、ケスティウスはこの間に埋葬されたとみなされている⁴⁷。

碑文からはケスティウスがピラミッド墓を建設した意図を読み取ることは難しいが、当時のローマ人たちは、ピラミッドを目にすることでアウグストゥスのエジプト征服を容易に連想したともされている⁴⁸。当時、ルナ(現カッターラ)産の白大理石で化粧張りされたこの建物が際立って見えていたことは想像に難くない。

39 Davies 2011: 381.

40 スエトニウス「アウグストゥス」94.

41 スエトニウス「アウグストゥス」29など。

42 スエトニウス「アウグストゥス」70.

43 たとえば、Boatwright 2012: 110.

44 《ケスティウスのピラミッド墓》に関しては、おもに以下を参照。Krause 1999; Feraudi-Gruénais 2001: 135-137; Vout 2003; Kolb, Fugmann 2008: 54-59, cat. no.9.

45 *CIL* 6.1374: C(aius) Cestius L(uci) f(ilius) Pob(lilia) Epulo pr(aetor) tr(ibunus) pl(ebis) / VIIvir epulonum // Opus ab solutum ex testamento diebus CCCXXX / arbitrato / [L(uci)] Ponti P(ubli) f(iiii) Cla(udia) Melae heredis et Pothi l(iberti).

46 *CIL* 6.1375: M(arcus) Valerius Messalla Corvinus, /P(ublius) Rutilius Lupus, L(ucius) Iunius Silanus, / L(ucius) Pontius Mela, D(ecimus) Marius / Niger heredes C(ai) Cesti et / L(ucius) Cestius quae_(sic) ex parte ad/eum fratris hereditas / M(arci) Agrippae munere per- / venit ex ea pecunia quam / pro suis partibus receper(unt) / ex venditione Attalico(rum) / quae eis per edictum / aedilis in sepulcrum / C(ai) Cesti ex testamento / eius inferre non licuit.

47 Krause 1999. 年代は下限をとって前12年頃とするものも多いが(Vout 2003; Favro 2005など)、その一方で上限とする前18年の奢侈禁止令の存在自体を疑問視し、前12年以前とする見解もある(Kolb, Fugmann 2008など)。

48 Favro 2005: 251. Vout 2003は、むしろこのピラミッドが被葬者の思想を反映した葬礼記念物であるとみている。

2. 「エジプト趣味」の壁画

2-1. アウグストゥス時代の壁画と「様式」

《ケスティウスのピラミッド墓》の室内は、白地の壁を長方形パネルのように線で区切り、パネルとパネルの間に細長い燭台を描いた単純な構図による壁画で装飾されている⁴⁹。パネルの中央には人物や壺が、また天井の四隅には飛翔する勝利の女神ニケが配される。このタイプの壁面装飾はローマ壁画の分類法でいう「第3様式」にあたり、さらに第2様式の末期から第3様式の初期にみられる装飾として「燭台様式」という名称がついている。ローマ壁画の分類法は、19世紀末にドイツの研究者アウグスト・マウがウィトルウィウス『建築書』（アウグストゥスに献上されている）や、後79年にヴェズヴィオ火山の噴火で埋没したポンペイおよびヘルクラネウム遺跡の壁画をもとに「第1様式」から「第4様式」まで年代区分したものであり、現在でも改訂されながらも基本的な分類法としてもちいられている⁵⁰。とはいえ、実際は壁画の制作時期と流行年代が必ずしも一致するわけではなく、また何よりも埋没時にすべての「様式」が揃っていたということは、この場合、本来は地域の差異や時代的あるいは年代的な推移をみていくうえでもちいる「様式」という用語が適語ではないことを物語っている。しかし、このマウが提示した「4様式」の分類は影響力が大きく、現在でも、問題があるのを踏まえたうえでこの用語が慣用的にもちいられている⁵¹。

《ケスティウスのピラミッド墓》の壁画は「燭台様式」における初期の例として挙げられるが⁵²、燭台で区切った装飾タイプは第3様式の典型的な作例とはいえない。アウグストゥス時代に登場した第3様式は、列柱廊などの建築物や円柱や梁といった建築要素をもちいてイリュージョニスティックに空間の奥行を表現していた第2様式とは異なり、その奥行きを否定して水平及び垂直方向に平面を3分割するのが特徴である⁵³。ケスティウスの墓にも平面性や壁面分割はみられるが、すでに第2様式末期から登場して第3様式、また第4様式の特徴となっていく壁面中央の強調（とくに「タブロー画」）や、まさに第3様式の特徴といえる細密画的な細部へのこだわりもみられない。第3様式は、マウが「装飾の様式」と命名したほど細部の装飾性に富んでいるのである。

49 Bastet, de Vos 1979: 28, fig. 2などを参照。

50 Mau 1882. 4様式の分類法に関しては、おもに Strocka 2007; Ling 1991を参照。第3様式に関しては、ほかに以下などを参照。Bastet, de Vos 1979; パッパラルド 1991. また、アウグストゥス時代の壁画に関しては、Clarke 2005も参照。ウィトルウィウスの邦訳として、森田 1979.

51 マウによる「4様式」分類や「様式」という用語の踏襲に対しては、第4様式以降の作例にはこの分類が適用できず、ローマ時代の壁の全容を捉えるのに適していない、またヴェズヴィオ火山周辺地域においても分類し難い壁面装飾があるなど問題が多い。近年では、このあまりに大きな影響力（支配）から脱却するかのように、あるいはその影響力による問題の大きさを考慮に入れてか、「4様式」を前面に出さずに壁画を研究しようとする動きもみられる。例えば、Bragantini, Sampaolo 2009では、カタログの作品解説に「様式」を掲載せず、制作年代のみとしている。これとは対照的に、同年出版の La Rocca *et al.* 2009では、様式年代を再検討している箇所もあり、各作品に「様式」と年代の両方を付すとともに、巻末に「4様式」を解説するページを割いている。

52 壁画の制作年代に関する見解が一致しているわけではない。例えば、Bastet, de Vos 1979: 8は前12年頃として年代の基準となる作例としており、パッパラルド 1991: 234や Ling 1991: 53; Baldassarre *et al.* 2002: 180 (M. Salvadori)なども同年に年代づけているが、Strocka 2007: 306, 314は、第3様式の開始年代とする前20年頃に位置づけている（本註47も参照）。

53 ボスコトレカーゼ出土「アグリッパ・ポストゥムスの別荘」部屋16（ナポリ国立考古学博物館、所蔵番号147501）など。

それぞれの様式年代は、地域や研究者によって異なるが、第1様式(前3—2世紀)、第2様式(前100年頃～15年頃)、第3様式(前20年頃～後50年頃)、第4様式(後40/50～79/100年頃)というのが公約数的な見解であるとしておく。

平面的であり、厳格な構図をもつ洗練された第3様式には、秩序正しい安定した生活を重んじていたアウグストゥス時代の風潮が反映されているとみられている。アウグストゥスの政策が直接的な影響を与えたとはいえないとしても、第2様式から第3様式へと装飾の表現方法が推移した背景を時代の嗜好の変化のみで説明するのは難しいであろう⁵⁴。

2-2. エジプト征服の影響

第3様式の壁画には「エジプト趣味」と呼ばれるエジプト・モチーフの装飾があり、オクタウィアヌスによるアクティウム海戦の勝利とアレクサンドリア攻略(前31-30年)を契機に登場したとされる⁵⁵。そのなかには女神イシスにまつわるものも含まれるが、一目瞭然とエジプト由来のモチーフと理解できるのは、動物神の礼拝場面や頭部が動物になった神の姿、アंकを手にした人物やウラエウス(聖蛇)を頭に載せたファラオらしき人物など、ファラオ時代を彷彿とさせる図像であり、それが第3様式における「エジプト趣味」の中核をなしている。ポンペイの「秘儀荘」タブリヌム(主人の間)や、ポンペイ近郊のボスコトレカーゼで発見された別荘、すなわち通称「アグリッパ・ポストゥムス荘」第15室「黒の間」(図2～4)および第19室「神話の間」(図5)などにその作例がみられる。

エジプトを想起させる風景画は、《ナイル河風景モザイク》のようにすでにローマ美術のレパートリーとして存在していたが、第3様式の「エジプト趣味」に特徴的なファラオ時代風の装飾はそれとはまた別の系統であるとされる⁵⁶。

第3様式における「エジプト趣味」の兆候はローマの第2様式末期の壁画にみられ、パラティーノ丘の建築複合体の一部をなしていた「アウグストゥスの家」や「リウィアの家」「アウラ・イシアカ(イシスの間)」、またテヴェレ川沿いの「ファルネジーナの別荘」にエジプト・モチーフが認められる。これらパラティーノ丘の遺構群はアウグストゥスの邸宅の一部であるとされ、また「ファルネジーナの別荘」は、年代や所有者に関して確固たる根拠はないながらも、一般的にアグリッパとアウグストゥスの娘ユリアによる前21年の結婚を記念した建物とされた。

これらの建物が皇族との関連性が示唆されていることも補強材料となって、第2様式末期および第3様式にみられるエジプト装飾のレパートリーは、エジプト征服の比喩表現としてアウグストゥスやアグリッパが導入したとする見解がある⁵⁷。それによると、比喩的にもちいられたエジプト・モチーフは、最初、植作文によるフリーズの形をとって目立たぬように、しかし幾度も繰り返して登場する。それは壁画に限ったことではない。エジプト征服直後に建設が開始された《アウグストゥス墓廟》にも、同様のエジプト装飾がみられる。大理石製コーニス(軒飾り)の断片が残存してい

54 Clarke 2005は、アウグストゥス時代における第2様式から第3様式への推移をプロパガンダか流行かという二元論的な観点でとらえ、壁面中央のアエディクラ(建築的枠取り)とタブロー画の導入がきっかけとなって画工たちがもたらした新しい流行であるとして、室内装飾をプロパガンダとするのは過剰な解釈であると指摘している。

55 「エジプト趣味」の壁画に関しては、おもに de Vos 1980; ead. 1991を参照。

56 第3様式のエジプト装飾における「ファラオ時代的な系統」と「風景的な系統」に関しては、de Vos 1980: 75-89を参照。

57 de Vos 1991を参照。

るが、その格間には、太陽円盤や聖蛇ウラエウスなどをあしらったエジプト王冠とハスの花の浮彫り装飾がついている。エジプト王冠は、上下エジプト統一の儀式でファラオが被ったアテフ冠であり、王冠によってファラオを意味している⁵⁸。通称「アウグストゥスの家」の「上階の寝室（クビクルム）」と呼ばれる一室にもエジプト王冠のフリーズがみられるが、これもまた、ローマ人の手に渡ったエジプトの王権を示唆しているという⁵⁹。

壁画以外の分野の装飾においても、エジプト征服の前と後では、作品にはローマとエジプトとの関係の変化が反映されているとする見解がある⁶⁰。

2-3. ファラオ時代風の図像

「アグリッパ・ポストゥムス荘」（ボスコレトレカーゼ）は、ポンペイと同様に後79年におけるヴェズヴィオ火山噴火によって埋没している⁶¹。1902年にヴェズヴィオ周遊鉄道の建設工事で発見され、翌年から1905年にかけて土地の所有者が部分的な発掘を行ったものの、1906年における噴火で再び埋没している。別荘の部屋を装飾していた壁画は、発掘の際に壁体から剝がされて売却され、現在、ナポリ国立考古学博物館とメトロポリタン美術館に所蔵されている。別荘からは「アグリッパの孤児 *Pupillus Agrippae*」と前11年の執政官名が記された刻印付き瓦のほか⁶²、皇族との関係を推測させる碑文が発見されている。「アグリッパの孤児」とは、アウグストゥスの娘ユリアと彼の右腕アグリッパの息子であり、アグリッパの死後に誕生したアグリッパ・ポストゥムス（前12-後14年）とされ、彼が別荘の所有者であったとの推察から「アグリッパ・ポストゥムス荘」と呼ばれている。別荘遺構には第2様式の壁画もあったという記録があり、別荘は前20年頃にアグリッパによって建設され、死後に息子の手に渡ったとされる⁶³。第3様式の壁画は、刻印付き瓦の年代から前11年頃に制作され、息子が別荘を所有した時期にあたるという見解が一般的である⁶⁴。

58 de Vos 1980: 74は《アウグストゥス墓廟》の王冠に関する項目名を「キャンパス・マルティウスにおけるファラオとしてのアウグストゥス Augusto Faraone nel Campo Marzio」としている。コーニス断片の写真は、de Vos 1980: 口絵、または Arachne, “52034: Architekturfragment. Roma, Rom, Mausoleum des Augustus” を参照 <http://arachne.uni-koeln.de/item/objekt/52034> (2014年9月30日接続)。

59 通称「アウグストゥスの家」「上階の寝室」の壁画に関しては、Carettoni 1983: 402-408, pls. 104-108; Borrello, Musatti 2009: 30-52, esp. fig. 2.17a を参照。

60 Swetnam-Burland 2012は、エジプト征服をはさんで基準となる作例として、《ナイル川風景モザイク》と《ナイル河擬人像》（後2世紀、ヴァティカン美術館蔵）とを比較しており、前者の制作には異国を知るための教育的な目的があったのに対し、後者の場合にはすでに共有できている知識を要約するのが目的であったとする。

61 「アグリッパ・ポストゥムス荘」に関しては、おもに Blanckenhagen, Alexander 1990 を参照。

62 Della Corte 1922: 478.

63 Blanckenhagen, Alexander 1990: 3 は、アグリッパがローマに帰還し、ユリアと結婚した前21年から、前16年にユリアとともに再び東方に出発するまでの期間に別荘建設が開始されたとする。

64 Blanckenhagen, Alexander 1990; Baldassarre *et al.* 2002: 155など。これに対して、Bastet 1979: 8-9 は、ローマおよびヴェズヴィオ火山周辺出土の第3様式による壁画を前20年頃から後45年頃までの5時期 (Ia-c, IIa-b) に分類するなかで、メトロポリタン美術館蔵の壁画を第3様式の最盛期であったとする Ic 期 (後1-25年頃) に位置づけており、後7年以前に制作された可能性が高いとしながらも、アグリッパ・ポストゥムスが流刑されたのと同年に別荘の所有者が変わったのであれば、その直後に制作された可能性もあると年代づけている。Strocka 2007は、後1-10年とする。その他の説など、壁画の制作年代に関しては本文にて後述する。

断片的に保存された「黒の間」(図2～4)は、部屋名称の由来どおり黒地の壁が中間の層を占め、その下に描かれた腰羽目の赤と対比をなしている。メトロポリタン美術館に復元された部屋では、遺構の壁から切り取られて額絵のようになった壁画が壁に埋め込まれている。壁面中央を囲む華奢なアエディクラ(建築的枠取り)の左右には、中ほどで横向きになって翼を広げる一対の白鳥をアクセントにした細長い燭台がすらりと伸びており、白地の枠で縁どられた黄色地の小タブロー画を掲げている。ピナケス(奉納額)のような小タブロー画には礼拝場面が表わされており、いずれも中央で台の上に立つ動物と、その左右で立っているか膝をつけて座る二人の人物によって構成される。向かって左側の小タブロー画(図3)では、中央で角を生やした牛が向かって左を向いて四脚の台にのり、その下か手前では蛇が鎌首をもたげている。画面左に立つほぼ右横向きの人物は褐色の肌をしており、くるぶしまで届く白い衣を身にまとい、頭にウラエウスのついた冠をかぶり、両腕を手前に出している。その人物の背後、つまり画面左端には頸の長い壺が置かれている。いっぽう画面右の人物は、低い台の上で膝をつき、向かって左を向いている。左の人物と同様に褐色の肌をしており、頭には太陽円盤のついた冠をかぶり、両腕を上げて途中で折れ曲がった棒のようなものを持つ。また、頭部は鼻先のとがった動物になっている。左の人物は褐色の肌をしていることから男性の礼拝者とされるが、性別に関しては異論もある⁶⁵。中央の動物はおそらく牛神アピス、また右の人物はネケク(穀竿)を手にしたワニ頭の神ソベクであろうとみられているが⁶⁶、ソベク神の神官姿の支配者(王)とする見解もある⁶⁷。

壁面向かって右側の小タブロー画(図4)は、中央ですらりとした体型をし、細長い尾を巻いた暗褐色のイヌ科の動物(犬またはジャッカル)が低い台の上で向かって左向きに立っている。画面左で膝をついて向かって左横を向く人物は白色の肌をしているが、顎には髯がみられる。緑や青、褐色によって塗り分けられた膝丈の衣を身にまとい、頭には太陽円盤をつけ、右手を前に出し、左手を掲げて葉のついた枝を持つ。いっぽう画面右で左を向いて立つ人物は暗褐色に近い肌の色をしており、左の人物の服と同色をもちいたくるぶしまで届く長い衣を身にまとい、頭には2本の羽根をつけている。掲げた右手にはシストゥルムを持ち、下ろした右手には把手のついた容器のようなものを持つ。中央の動物はジャッカル神アヌビスとされるが⁶⁸、同じジャッカル神であってもウェブワウエトとする見解もある⁶⁹。画面左で膝をつく人物は、奉納者または王族の礼拝者であるとみられている⁷⁰。右に立つ人物は、イシス女神を象徴するシストゥルムや聖水容器を手にしており、イシス女神とする見解、また女神自身というよりもイシスの神官とする見解があるが、神官とする場合でも男性説と女性説の両方がある⁷¹。

これらの小タブロー画にみられるように、ローマ壁画のエジプト装飾では描かれた人物や動物な

65 Knauer 1993は、純粋なエジプト絵画では褐色の肌は男性を示すものであるが、この慣習は後の時代になると無視されることがあるとし、この人物を女性とみなしている。

66 Blanckenhagen, Alexander 1990: 6, note 12; de Vos 1980: 5.

67 Knauer 1993: 15-17.

68 Blanckenhagen, Alexander 1990: 6, note 12; Knauer 1993: 17.

69 de Vos 1980: 7-8 は、アヌビス神は立ち姿で表現されることはないとする。

70 de Vos 1980: 8; Knauer 1993: 17; Blanckenhagen, Alexander 1990: 6, note 12は、この人物をアモン神としながらも、エジプトの図像では膝をついて表現されることはないといふ追加している。

71 de Vos 1980: 7は、シストゥルムはファラオ時代の図像では女性が持つものであるが、ヘルクラネウムやポンペイ出土の壁画に男性神官が手にしている作例があるとして、この人物を男性説とみなす。これに対して、Knauer 1993: 17は女性とみている(本註65も参照)。

どが必ずしも伝統的なエジプトの図像と合致しないため、ローマ人が表現する際に理解ができないままに誤ってしまうこともあったとしばしば指摘されるが⁷²、これに対してはプトレマイオス王朝時代のエジプトにおいてすでに図像の混合がみられるとする反論もある⁷³。いずれにしても、ローマ人がこれらの表現を目にした際に、エジプトの雰囲気伝わってきたことは間違いのないであろう。

「黒の間」にはエジプト装飾の小タブロー画のほか、アポロ神の聖鳥でもある白鳥も描かれているため、これもアポロを守護神とするアウグストゥスのエジプト征服を謳歌しているとする解釈が成り立つ。別荘の所有者がアグリッパであったという推定も、いわゆる「エジプト趣味」が宮廷から発信されたとするさらなる根拠となった⁷⁴。この「黒の間」における2枚の小タブロー画に関しては、壁画を別荘所有者とさらに結びつけようとする解釈もある。上述の人物特定に関連したものであるが、それぞれの小タブロー画において、膝をつく人物は跪拝する男性の王族、立っている人物は礼拝する女性の王族であるとし、男性をアグリッパ、女性を妻ユリアとする解釈である⁷⁵。興味深い解釈ではあるが、エジプト装飾にどこまでの比喩を見出すかは難しい問題である。また、アウグストゥスがエジプトの動物崇拝に拒絶反応を示し、エジプト滞在中に動物神（牛神アピス）への礼拝をしようとしなかったという古代の記述があるなかで⁷⁶、たとえ私的な建物であろうと、彼の側近にあたる人物がローマにおいて動物を礼拝するファラオ姿で自分を描かせたとする解釈が成り立つかどうか疑問の余地が残るところである。

3. 壁画の制作年代をめぐる問題

3-1. パラティーノ丘の遺構「アウグストゥスの家」

スエトニウスをはじめとする古代の記述をつなぎ合わせていくと、アウグストゥスが住んだパラティヌス（現パラティーノ）丘の邸宅には以下のような変遷があった⁷⁷。

彼はもともとフォルム・ロマヌム付近に住んでいたが、その後パラティヌス丘にあったホルテンシウスの家に移る（Suet. *Aug.* 72.1）。ホルテンシウスとは、カエサル暗殺者ブルトゥスに加担し、前42年フィリッピの戦いで戦死した後、財産を没収されたクイントゥス・ホルテンシウスではないかとされる⁷⁸。前36年、シチリア島ナウロコス沖の海戦でセクストゥス・ポンペイウスに勝利してローマに帰還すると、オクタウィアヌスは自宅を拡張するために購入していた近隣の住宅を公的使用に当て、またアポロ神殿と神殿に付属する列柱廊を建設すると約束した（Vell. 2.81.3）⁷⁹。彼の所有地にアポロ神殿を建設することになったのは、その場所に落雷による神のお告げがあったからである（Suet. *Aug.* 29.3；Cass. Dio 49.15.5など）⁸⁰。この神殿は前28年に奉献された（Cass. Dio 53.1.3など）。オクタウィアヌスが神殿建設を約束した年、ローマ市民たちは彼が購入していた土地に国

72 de Vos 1980: 79-80による分析がもとになっている。

73 Knauer 1993: 16など。

74 de Vos 1980; *ead.* 1991など。

75 Knauer 1993.

76 スエトニウス「アウグストゥス」93.

77 スエトニウス「アウグストゥス」29.3, 57.2, 72.1-2；ウレレイウス・パテルクルス『ローマ世界の歴史』2.81.3；カッシウス・ディオ『ローマ史』49.15.5, 54.27.3, 55.12.4-5など。アウグストゥスの邸宅に関しては、おもに Iacopi 1995; Hall 2014: 167-185を参照。

78 Papi 1995.

79 邦訳として、西田、高橋 2012.

80 落雷に関しては、Heckster, Rich 2006も参照。アポロ神殿に関しては、Gros 1993を参照。

費で彼の家を建てることにしている (Cass. Dio 49.15.5)。前27年、元老院決議によりアウグストゥスの称号が彼に与えられた際には、邸宅入口の柱に月桂樹を飾り、また戸口の上に市民冠をつけることも決められた (*Res Gest.* 34.2など)。前12年に大神祇官になると、アウグストゥスは邸宅にウェスタ女神も迎え入れることになった (*Ov. fast.* 4.952など)⁸¹。前2年、元老院と騎士身分、ローマ市民によって「国父 *pater patriae*」の称号を与えられた際には、元老院決議により、邸宅のウェスティブルム (玄関入口) にその称号を刻むことが決められた (*Res Gest.* 35.1)。その後、彼の邸宅は後3年におけるパラティヌス丘の火災で被害を受け、再建されている (*Suet. Aug.* 57.2)。

スエトニウスによれば、アウグストゥスの邸宅はつましく、床が大理石で装飾された部屋もなく、夏冬 [によって別の寝室を利用する慣習] にもかかわらず彼は40年以上も同じ部屋で眠っていた (72.1)。また、邪魔をされずにいたいときには、建物の高所にある「シュラクサエ *Syracusae*」 「テクニフィオン (小工房) *technyphion*」と呼んでいた場所にこもったという (72.2)。

現在、パラティーノ丘にある遺構群の一部をなす通称「アウグストゥスの家」は、19世紀ナポレオン三世の時代に発掘が開始され、1950年代半ばから1980年代初頭にかけて重点的な調査がおこなわれた⁸²。この遺構は9メートルの高低差はあるものの、アポロ神殿の遺構に隣接していることもあり、神殿建設と時期を同じくして改築されたアウグストゥスの邸宅の一部であるとみなされた。第2様式の壁画で装飾された部屋のなかには、エジプト装飾とともに、アポロ神の聖鳥でもある白鳥が表わされた「上階の寝室」(前述)があり、その壁画はエジプト征服を象徴するとして前30年頃に年代づけられるとともに、通称「アウグストゥスの家」における壁画は、壁画研究において制作年代の基準とされた⁸³。また、「上階の寝室」は、アウグストゥスが使用していた「小書齋 *Studiolo*」、すなわちスエトニウスによって伝えられる「シュラクサエ」であろうと推定された。

その後、1990年代から壁画の修復作業とさらなる発掘調査、またアポロ神殿の遺構に関する発掘調査がおこなわれたことにより新たな知見が加わり、2006年の調査報告によって従来の説に大きな変更が加えられた⁸⁴。神殿に付属する列柱廊の基礎が「アウグストゥスの家」の建物を分断しており、「アウグストゥスの家」は、アウグストゥスの邸宅の一部とみられていた「リウィアの家」「アウラ・イシアカ」も同様に、神殿建設のために埋め立てられたと発表されたのである。神殿とともに建設された当初は邸宅から神殿へ直結していたと考えられていた傾斜路は、実際は邸宅の下の部分と上の部分とを繋いでいた⁸⁵。

複雑な壁体構造をもつ通称「アウグストゥスの家」の遺構は、古代の記述や歴史的事項を照合しつつ、次のような変遷をとげたと解釈された。前42年頃、オクタウィアヌスがホルテンシウスの邸宅に住み始めると、中庭周辺の改築をおこなった。前36年にナウロコス沖海戦でセクストゥス・ポンペイウスに勝利した後、近隣の土地を購入して邸宅を拡張していく。遺構には建設途中で終わっている箇所がみられるため、前36年にアポロ神殿の建立を約束したものの、彼が実際に神殿の建設にとりかかったのは前31年のアクティウム海戦後であり、これまでの邸宅の拡張計画もその際に放棄されて、神殿とともに邸宅が新たに建設された。また、遺構に火災の痕跡がみられないことから、後3年にあったと伝えられる火災の被害を受けなかったのは、すでに埋め立てられていたためであ

81 邦訳として、高橋 1994.

82 発掘史および研究史に関しては、おもに Borrello, Musatti 2009: 1-20 (Borrello) を参照。

83 邸宅遺構の壁画に関する発掘報告は、Carettoni 1983を参照。「上階の寝室」の壁画に関しては、本註59を参照。

84 Iacopi, Tedone 2005/2006.

85 Carettoni 1983: 388-389; Iacopi, Tedone 2005/2006: 363.

るとした。新しい邸宅は、前28年の神殿奉献と同時期に完成する。通称「アウグストゥスの家」は、アウグストゥスと称される以前のオクタウィアヌスの家の遺構であったということになる。

3-2. 制作年代および図像解釈への影響

この新説は、「アウグストゥスの家」の部屋を装飾していた第2様式による壁画の制作年代にも修正を加えることになる。エジプト装飾がある「上階の寝室」の壁画は、オクタウィアヌスによるエジプト征服直後の前30年頃に制作されたとみられていたが、邸宅の建設初期にあたと改められた。そればかりか、この部屋の壁画がエジプト征服の象徴であるという従来の図像解釈も成立しなくなってしまったのである。その代わり新たな制作年代と背景が提示された。エジプト装飾の存在や、アレクサンドリア出身の画工の手によるものではないかという以前からの指摘はそのまま考慮の対象となり⁸⁶、それに見合う歴史的なきっかけとして、前46年から44年にカエサルの人客としてやってきたクレオパトラのローマ滞在が想定された⁸⁷。また、「上階の寝室」は、アウグストゥスが「シュラクサエ」「テクニフィオン」と呼んで使用した「小書斎」とはまったく関係のない部屋となった。

基準となっていた一連の壁画の制作年代が変更された影響は、「アウグストゥスの家」や「リウィアの家」など、アウグストゥスの邸宅遺構の作例のみで留まることはなかった⁸⁸。これらの作例と相対的に年代比定されていた第2様式末期から第3様式初期の壁画の制作年代や図像解釈も問い直されることになったのである⁸⁹。アグリッパとユリアの結婚を記念したという「ファルネジーナの別荘」のエジプト装飾も、アウグストゥスによるエジプト征服が影響しているのではなく、おそらく「異国趣味」は前2世紀にすでに普及しており、その人気はクレオパトラのトラステヴェレ滞在期間に急上昇した結果であろうとする見解も出されるようになった⁹⁰。壁画の制作年代は前30年よりも前に引き上げられ、所有者に関しては以前より異論もあったが、有力候補者の前21年に結婚したアグリッパとユリアとももはや関連性はないとされた⁹¹。

ポスコトレカーゼで発見された「アグリッパ・ポストゥムス荘」の壁画に関しても、同様に制作年代を引き上げる説が出されている⁹²。従来は別荘がアグリッパ・ポストゥムスの所有となった前11年頃の制作とされていたが、その説によれば、父親アグリッパの時代、すなわち前20年頃（前1世紀第4四半期）に年代づけられたのである⁹³。

現在、パラティーノ丘の遺構群に関して調査や分析がまだ継続されており、遺構群全体の建設時期や解釈については百家争鳴といった状況である⁹⁴。パラティーノ丘の全体像が明らかにされるまでにはまだ時間を要するであろう。第2様式末期から第3様式初期の壁画の制作年代に関しても、

86 Carettoni 1983: 416.

87 Iacopi, Tedone 2005/2006: 374.

88 アウグストゥス邸宅遺構における壁画の制作年代に関しては、Bragantini, Sampaolo 2009: 50, note 2 (Bragantini) も参照。

89 La Rocca 2008.

90 La Rocca 2008: 238.

91 La Rocca *et al.* 2009: 272-274 (La Rocca).

92 La Rocca 2008: 242, note 64; La Rocca *et al.* 2009: 275-276 (La Rocca).

93 これに対して、Bragantini, Sampaolo 2009では、「リウィアの家」の壁画に関しては制作年代の引き上げに言及しているものの、「アグリッパ・ポストゥムス荘」の場合は、前11年頃の説をとっている。

94 「アウグストゥスの家」の遺構をめぐる諸説に関しては、おもに Hall 2014: 167-185を参照。また、この邸宅跡や「アポロ神殿」などを含むパラティーノ丘の遺構群に関しては、Coarelli 2012; Pensabene, Gallochio 2011; *id.* 2013; Tomei 2013; Wiseman 2009も参照。

ある程度の共通見解が間もなく得られるということはないであろう。しかし、2006年の報告書が従来の壁画研究に一石を投じ、それによって新たな波紋が生じたことは確かである。

おわりに

「アグリッパ・ポストゥムス荘」には、第19室を装飾する第3様式による壁画にもエジプトの神々を表現したエジプト・モチーフがみられる（図5）。赤地パネルの中央に細長い燭台が真っ直ぐに立ち、パネルの上に黄色地フリーズが配される。フリーズの中央で正方形の小タブロー画として登場し、両脇にはそれぞれ仮面やグリュフォンが描かれた横長の小タブロー画が並ぶ。しかし、この部屋の壁面中央パネルはその赤地パネルではない。壁面中央は黒地パネルであり、パネルには、大きな神話画がその大部分を占めている。メトロポリタン美術館に所蔵される2枚のパネルには、それぞれ「ポリュフェモスとガラテア」「ペルセウスとアンドロメダ」（図6）を主題にした、海にまつわるギリシア神話の場面が描かれている。この一室は、それらの神話画にちなんで「神話の間」と称される。

本稿ではこれまでエジプト装飾を取りあげてきたが、「神話の間」に代表されるようにエジプト・モチーフはその部屋の主要な要素というわけではなく、むしろ副次的な部分にアクセントとして装飾されていたのである⁹⁵。中央の神話画とは異なる図像や描法であり、その点で確かに人目は引いたであろうが、部屋にいた人物がエジプト装飾のみに注目して中央の神話画が目に入らなかったということはあるまい。一部の要素を抽出する作業では、その要素に焦点を絞るために壁面装飾の全体像はぼやけていってしまうのである。むしろ、エジプトとギリシアの異質な要素がひとつの空間で調和をなしていることが重要なのである⁹⁶。「神話の間」の英雄たちをたとえばアウグストゥスになぞらえ、エジプト装飾の存在を加味して、エジプト征服の影響と解釈することも可能かもしれないが、それはあくまでも歴史的に有名な前30年におけるエジプト征服の象徴を壁画に見出そうとする行き過ぎた解釈なのかもしれない。異質な要素が併存することが「ローマらしさ」、あるいはローマ美術の特色ともされる⁹⁷。ギリシアとエジプトのいずれもローマによって支配された土地であり、征服地の要素を戦利品として集めた延長線上にこれらの壁画を位置づけることも可能であろうが、実際に邸宅内の壁画を目にしていたローマ人たちが歴史的あるいは政治的な出来事にまで想いを馳

95 ポンペイ出土「果樹園の家」(I, 9, 5) 部屋8の庭園画でもギリシア神話の小タブロー画が中間層の壁面中央に配され、上層に牛神アピスなどの小タブロー画がおかれる。なお、「黄金の腕輪の家」(VI, 17 [insula occidentalis], 42) 部屋31では、中間層の側パネルにアピス神の小タブロー画がみられるが、あわせてギリシア神話の登場人物が壁面中央に描かれている。これらの作例では、中間層の左右パネルに描かれた茂みにファラオやスフィンクスの彫刻が紛れ込んでいる。これらの壁画は、「アグリッパ・ポストゥムス荘」よりも後の制作時期（後35-40年頃）に位置づけられる。前者に関しては de Vos 1980: 15-19, pls. XII-XVI; PPM 2 (1990) 15-35 (de Vos, M.)、また後者に関しては PPM 6 (1996) 129-137 (Sampaolo, V.) などを参照。

96 Elsner 2006は、研究者が自分の関心に応じて特定の要素のみを抽出してしまう傾向があると指摘している。エジプト装飾に対する過大評価に関しては、Vout 2003も参照。

97 Elsner 2006は、ギリシア以外の美術も包含した、多文化における過去の遺産の適応がローマ美術における「古典主義」であるとして、ギリシア的な要素として用いられてきた従来のこの用語を拡大解釈して定義づけ、エジプト装飾もまたローマ美術の古典主義であるとした。ローマ美術研究における「古典的」「非古典的」といった二元性および多元性に関しては、Brendel 1979による問題提起を受けている。

せていたかどうかという点に関しては憶測の域を出ない。

公的記念物においては、コインやオベリスクの作例にみられるように、政治的な事項であるエジプト征服を視覚化してローマ国民に伝えようとする意図が明確であった。しかし、邸宅や別荘の壁画においては、現段階の研究状況では、たとえ紀元前1世紀末や後1世紀初頭に年代づけられるものであっても、エジプト征服を象徴するという公的あるいは政治的な意図を読みとることは困難であるといえる⁹⁸。また、エジプト的な要素は壁面装飾の一部であるにもかかわらず、それをもとに前30年のエジプト征服と短絡的に関連づけてしまう傾向があることもすでに指摘されている⁹⁹。

政治的な意図のみならず、宗教的な意味の有無を判断するうえでもやはり困難がともなう¹⁰⁰。邸宅の場合、イシス女神の神官など、信仰にまつわると思われるような作例でさえも、神棚に祀られているのでなければ宗教的な機能をもっていたとは断定できず、それであるからといって、所有者がどのような人物であったのかも不明な状況では、それらの作例が「異国趣味」の装飾であると断定するわけにもいかないのである¹⁰¹。それでは逆に、イシス神殿であればすべてイシス女神やエジプトに関連のある装飾で埋め尽くされていると想像しがちであるが、ポンペイのイシス神殿（後62年の地震により再建）を例にとってみると、エジプトとは関係のないギリシア神話の場面がイシス信仰のモチーフと組合わされており、ギリシア神話の表現にあえて宗教的な意味づけをするよりも同時代の好みを反映した装飾であるとみなしたほうが無理のないものもある¹⁰²。

最後に、第3様式による壁画にエジプト征服の影響がまったくみられないのかどうかをあらためて考えてみたい。「アグリッパ・ポストゥムス荘」のようなファラオ時代風の神々や人物は、その後姿を消してしまったのではなく、後4世紀になってエスキリーノ丘に建設された「ユニウス・バッシスのバシリカ」のオプス・セクティレ（嵌め込み細工）による床面装飾にも登場する¹⁰³。それも興味深いことに、美少年ヒュラスをさらうニュンプたちをあらわしたギリシア神話の場面に付随して、フリーズ（もしくはタペストリー *velum*）や小さい枠をつけた形で配されている。しかし、ローマ、とくにポンペイやヘルクラネウムなどヴェズヴィオ火山周辺地域の壁画では、その作例数からみても、それらはやはり第3様式にみられる特徴といえるのである¹⁰⁴。第3様式による壁画が制作されていた時期は一般的に後50年頃までとされており、アウグストゥス時代の後も続けて制作されている。壁画の流行時期は長く、また流行が始まったからといってすぐに壁を塗り替えるわけでもない。新しい壁画がそれまでの壁画に取って代わるのは、耐久年数が経過したり、増改築や改修をしたりした場合である¹⁰⁵。壁画以外の装飾品も精査したうえで結論づけなければならないことであるが、前2世紀にはすでにあった《ナイル川風景モザイク》にみられるような風景やその部分的な要素とは異なる装飾タイプの登場には、やはり何らかの背景があったと考えられる。それをカエサルに始まるプトレマイオス王朝エジプトとローマの親密な交流、あるいはエジプトへの介入、また

98 ヘルクラネウムでは、公共建築物であるパラエストラ（運動場）の壁画にも帯状装飾のなかにエジプト・モチーフがみられるが、筆者には何らかの公的な宣伝というよりもむしろ装飾としての機能が強いようにみえる。この作例に関しては、de Vos 1980: 21-22を参照。

99 Vout 2003: 195.

100 「エジプト趣味」の装飾とイシス信仰に関しては、Bragantini 2006を参照。

101 Bragantini 2006.

102 イシス神殿の壁面装飾に関しては、Moormann 2011: 149-162.

103 「ユニウス・バッシスのバシリカ」の床面装飾に関しては、Fusco 2013を参照。

104 de Vos 1980: 74-81.

105 Cfr. Clark 2005: 277.

その後のオクタウィアヌスによるエジプト征服に求めることは不可能ではないであろう。第3様式のエジプト・モチーフはエジプト征服そのものを象徴するわけではないが、エジプト征服という政治的な出来事とその時代の文化にエジプト・モチーフの形をとって反映されたのである。公的な宣伝であるのか、それとも流行なのかという二者択一ではなく、そのどちらもが関連しているのが別荘および邸宅の壁画なのである。

参考文献一覧

- Ashton, S.-A. (2004). *Roman Egyptomania* (London). Catalogue of an exhibition held at the Fitzwilliam Museum, Cambridge.
- Baldassarre, I., Pontandolfo, A., Rouveret, A., Salvadori, M. (2002). *Pittura romana. Dall'ellenismo al tardo-antico* (Milano).
- Bastet, F. L., de Vos, M. (1979). *Il terzo stile pompeiano. Proposta per una classificazione del terzo stile pompeiano* ('s-Gravenhage).
- Blanckenhagen, P. H., Alexander, C. (1990). *The Augustan Villa at Boscotrecase* (Mainz am Rhein).
- Boatwright, M. T. (2012). *Peoples of the Roman World* (New York and Cambridge).
- Borrello, L., Musatti, G. (2009). "La Casa di Augusto sul Palatino: il recupero e il restauro della decorazione pittorica," *Bollettino d'Arte* fasc. 2, serie VII. 1-116.
- Bragantini, I. (2006). "Il culto di Iside e l'Egittomania antica in Campania," in De Caro, S., ed, *Egittomania. Iside e il mistero* (Milano), 159-167. = "The Cult of Isis and Ancient Egyptomania in Campania," in Balch, D. L., Weissenrieder, A., eds. (2012), *Contested Spaces: Houses and Temples in Roman Antiquity and New Testament* (Tübingen). 21-33.
- Bragantini, I., Sampaolo, V., eds. (2009). *La pittura pompeiana* (Verona).
- Brendel, O. (1979). *Prolegomena to the Study of Roman Art* (New Heaven). 『ローマ美術研究序説』辻成史監訳、川上幸子、中村るい訳、三元社、2008年。
- Carettoni, G. (1983). "La decorazione pittorica della casa di Augusto," in *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Römische Abteilung* 90. 373-419, pls. 91-108, color pls. 1-16.
- Clarke, J. R. (2005). "Augustan Domestic Interiors: Propaganda or Fashion?," in Galinsky, 264-278, pls. II-VIII.
- Coarelli, F. (2012). *Palatium* (Roma).
- Cooley, A. E. (2009). *Res Gestae Divi Augusti: Text, Translation, and Commentary* (Cambridge).
- Curran, B. A. (1996). "Egyptomania: Egypt in Western Art, 1730-1930," book review, *The Art Bulletin* 78.4. 739-745.
- Davies, P. J. E. (2000). *Death and the Emperor. Roman Imperial Funerary Monuments from Augustus to Marcus Aurelius* (Cambridge).
- Davies, P. J. E. (2011). "Aegyptiaca in Rome: Adventus and Romanitas," in Gruen, E. S., ed., *Cultural Identity in the Ancient Mediterranean* (Los Angeles) 371-387.
- Della Corte, M. (1922). "Scavi eseguiti da private nel territorio di Pompei," *Notizie degli Scavi* 19: 459-485.
- de Vos, M. (1980). *L'Egittomania in pitture e mosaici romano-campani della prima età imperiale* (Leiden).
- . (1991). "Nuove pitture egittizzanti di epoca augustea," in Morigi Govi, C., Curto, S., Perignotti, S., eds., *L'Egitto fuori dell'Egitto. Dalla riscoperta all'Egittologia* (Bologna) 121-143.
- DNP Cancik, H. et al., eds., *Der Neue Pauly*, 16 vols. (Stuttgart, Weimar).
- Draycott, J. (2012). "The Symbol of Cleopatra Selene: Reading Crocodiles on coin in the Late Republic and Early Principate," *Acta Classica: Proceedings of the Classical Association of South*

- Africa* 55. 43-56.
- Elsner, J. (2006). "Classicism in Roman Art," in Porter, J., ed., *Classical Pasts: The Classical Traditions of Greece and Rome* (Princeton) 270-301.
- Favro, D. (2005). "Making Rome a World City," in Galinsky, 234-263.
- Feraudi-Gruénais, F. (2001). *Ubi diutius nobis habitandum est. Die Innendekoration de kaiserzeitlichen Gräber Roms* (Stuttgart).
- Fusco, R. (2013). "Pannello con Hylas rapito dalle ninfe, pannello con scena di circo," in Gasparri, C., Paris, R., ed., *Palazzo massimo alle terme. Le collezioni* (Milano) 482-485.
- Galinsky, K. (2012). *Augustus: Introduction to the Life of an Emperor* (Cambridge).
- , ed. (2005). *The Cambridge Companion to the Age of Augustus* (Cambridge).
- Gregory, S. R. W. (2012). "The Obelisks of Augustus: The Significance of a Symbolic Element of the Architectural Landscape in the Transmission of Ideology from Egypt to Rome," *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 4.1. 9-30.
- Gros, P. (1993). "Apollo Palatinus," in Steinby, *LTUR* 1. 54-57.
- Gurval, R. A. (1998). *Actium and Augustus: The Politics and Emotions of Civil War* (Ann Arbor).
- Hall, J. M. (2014). *Artifact and Artifice* (Chicago).
- Heckster, O., Rich, J. (2006). "Octavian and the Thunderbolt: the Temple of Apollo Palatinus and Roman Traditions of Temple Building," *Classical Quarterly* 56.1. 149-168.
- Herklotz, F. (2012). "Aegypto Capta: Augustus and the Annexation of Egypt," in Riggs, 11-21.
- Heslin, J. (2007). "Augustus, Domitian, and the so-called Horologium Augusti," *Journal of Roman Studies* 97. 1-20.
- Iacopi, I. (1995). "Domus: Augustus (Palatium)," in Steinby, *LTUR* 2. 46-48.
- , Tedone, G. (2005/2006). "Bibliotheca e Porticus ad Apollinis," *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Römische Abteilung (RM)* 112. 351-378.
- Knauer, F. R. (1993). "Roman Wall Paintings from Boscotrecase: Three Studies in the Relationship between Writing and Painting," *Metropolitan Museum Journal* 28. 13-46.
- Kolb, A., Fugmann, J. (2008). *Tod in Rom* (Mainz am Rhein).
- Krause, C. (1999). "Sepulcrum: C. Cestius," in Steinby, *LTUR* 6. 278-279.
- La Rocca, E. (2008). "Gli affreschi della casa di Augusto e della villa della Farnesina: una revisione cronologica," in La Rocca, E., Pilar, E., Parisi Presicce, C., eds., *Le due patrie acquisite — studi di archeologia dedicati a Walter Trillmich* (Roma) 223-242.
- La Rocca, E., Ensoli, S., Tortorella, S., Papini, M., eds. (2009). *Roma. La pittura di un impero* (Milano). Catalogue of an exhibition held at the Scuderie del Quirinale.
- Ling, R. (1991). *Roman Painting* (Cambridge).
- Lupton, C. (2012). "Egyptomania, western," in Bagnall, R. S. et al., eds., *The Encyclopedia of Ancient History* 5 (Malden) 2340-2342.
- Mau, A. (1882). *Geschichte der dekorativen Wandmalerei in Pompeji* (Berlin).
- Meyboom, P. C. P. (1995). *The Nile Mosaic of Palestrina. Early Evidence of Egyptian Religion in Italy* (Leiden).
- Moormann, E. M. (2011). *Divine Interiors: Mural Paintings in Greek and Roman Sanctuaries* (Amsterdam).
- Papi, E. (1995). "Domus: Q. Hortensius," in Steinby, *LTUR* 2. 116-117.
- Pensabene, P., Gallochio, E. (2011). "Contributo alla discussione sul complesso augusteo palatino," *Archeologia Classica* 62. 475-487.
- . (2013). "Alcuni interrogativi sul complesso augusteo palatino," *Archeologia Classica* 64. 557-582.
- PPM Puliese Carratelli, G., ed. (1990-2003). *Pompei. Pitture e mosaici*, 10 vols. (Roma).

- Rehak, P. (2006). *Imperium and Cosmos: Augustus and the Northern Campus Martius*, Younger, J. G., ed. (Madison).
- Richardson, J. (2012). *Augustan Rome 44 BC to AD 14: The Restoration of the Republic and the Establishment of the Empire* (Edinburgh).
- Riggs, C., ed. (2012). *The Oxford Handbook of Roman Egypt* (Oxford).
- Roulet, Anne. (1972). *The Egyptian and Egyptianizing Monuments of Imperial Rome* (Leiden).
- Southern, P. (2014). *Augustus*, 2nd ed. (London, New York).
- Steinby, M. E., ed. (1993-2000). *Lexicon Topographicum Urbis Romae (LTUR)*, 6 vols. (Roma).
- Strocka, V. M. (2007). "Domestic Decoration: Painting and the 'Four Styles'," in Dobbins, J., Foss, eds., *The World of Pompeii* (London, New York) 302-322.
- Swetnam-Burland, M. (2007). "Egyptian Objects, Roman Contexts: A Taste for Aegyptiaca in Italy," in Bricault, L., Versluys, M. J., Meyboom, P.G.P., eds., *Nile into Tiber: Egypt in the Roman World* (Leiden, Boston) 113-136.
- . (2010). "Aegyptus Redacta: The Egyptian Obelisk in the Augustan Campus Martius," *Art Bulletin* 92/3. 135-153.
- . (2012). "Nilotica and the Image of Egypt," in Riggs, 684-697.
- Tomei, A. M. (2013). "Note su *Palatium* di Filippo Coarelli," *Journal of Roman Archaeology* 26, 526-538.
- Vout, C. (2003). "Embracing Egypt," in Edwards, C., Woolf, G., eds., *Rome the Cosmopolis* (Cambridge) 177-202.
- Wiseman, T. P. (2009). "Review of A. Carandini and D. Bruno, *La casa di Augusto di 'Lupercalia' al Natale*," *Journal of Roman Archaeology* 22. 527-45.
- Zanker, P. (1987). *Augustus und die Macht der Bilder* (München).

- ハバシュ、ラビブ。(1985)。『エジプトのオベリスク』吉村作治訳、六興出版。
- パップラルド、ウンベルト。(1991)。「ポンペイ第Ⅲ様式」チェルツリ・イレツリ、ジュゼッピーーナほか編『ポンペイの壁画』1、青柳正規、篠塚千恵子訳、岩波書店所収、230-239。
- 島田誠。(2006)。「『神アウグストゥスの業績録』(*Res gestae divi Augusti*)の性格と目的」学習院大学『人文』4: 105-130。

原典邦訳

- 岩谷智訳。(2008)。リウウィウス『ローマ建国以来の歴史』1、京都大学学術出版会。
- 国原吉之助訳。(1981)。タキトゥス『年代記』上、岩波文庫。
- 。(1986)。スエトニウス『ローマ皇帝伝』上、岩波文庫。
- 。(1996)。タキトゥス『同時代史』筑摩書房。
- 高橋宏幸訳。(1994)。オウィディウス『祭暦』国文社。
- 西田卓生、高橋宏幸訳。(2012)。ウェレイユス・パテルクルス『ローマ世界の歴史』京都大学学術出版会。
- 中野定雄ほか訳。(1986)。「プリニウスの博物誌』Ⅲ、雄山閣。
- 森田慶一訳。(1979)。ウィトルーウィウス『建築書』東海大学出版会。

図版一覧

1. オクタウィアヌスのデナリウス銀貨(前28年)。表: オクタウィアヌスの頭部およびリトゥウス CAESAR COS VI。裏: ワニ AEGVPTO (上) CAPTA (下)。大英博物館、番号1860,0328.114。
© The Trustees of the British Museum。出典: http://www.britishmuseum.org/research/collection_online/collection_object_details.aspx?searchText=silver%20coin%20crocodile&ILINK|34484|assetId=199960&objectId=1213672&partId=1 (2014年9月30日接続)
2. 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第15室「黒の間」、ボスコトレカーゼ出土、第3様式、高さ2.38m(バ

ネル残存部分)、メトロポリタン美術館、番号20.192.1. © The Metropolitan Museum of Art.

出典：“Aedicula with small landscape, Egyptianizing scenes: From the “Black Room” of the Imperial Villa at Boscotrecase [Roman] (20.192.1-3)”. In *Heilbrunn Timeline of Art History*. New York: The Metropolitan Museum of Art, 2000-. <http://www.metmuseum.org/toah/works-of-art/20.192.1-3>. (October 2006). (同日接続)

3. 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第15室「黒の間」、小タブロー画（左側）、ボスコトレカーゼ出土、第3様式、メトロポリタン美術館、番号20.192.1. © The Metropolitan Museum of Art. 出典：同上。
4. 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第15室「黒の間」、小タブロー画（右側）、ボスコトレカーゼ出土、第3様式、メトロポリタン美術館、番号20.192.1. © The Metropolitan Museum of Art. 出典：同上。
5. 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第19室「神話の間」、赤地パネル、ボスコトレカーゼ出土、第3様式、226.06 x 152.4 cm.メトロポリタン美術館、番号20.192.13. © The Metropolitan Museum of Art. 出典：<http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online/search/250942> (同日接続)
6. 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第19室「神話の間」、壁面中央「ペルセウスとアンドロメダ」、ボスコトレカーゼ出土、第3様式、159.39×118.75cm、メトロポリタン美術館、番号20.192.16. © The Metropolitan Museum of Art. 出典：“Landscape with Perseus and Andromeda: From the “Mythological Room” of the Imperial Villa at Boscotrecase [Roman] (20.192.16)”. In *Heilbrunn Timeline of Art History*. New York: The Metropolitan Museum of Art, 2000-. <http://www.metmuseum.org/toah/works-of-art/20.192.16>. (October 2006). (同日接続)



図1 オクタウィアヌスのデナリウス銀貨 (前28年)
© The Trustees of the British Museum



図2 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第15室「黒の間」
© The Metropolitan Museum of Art.

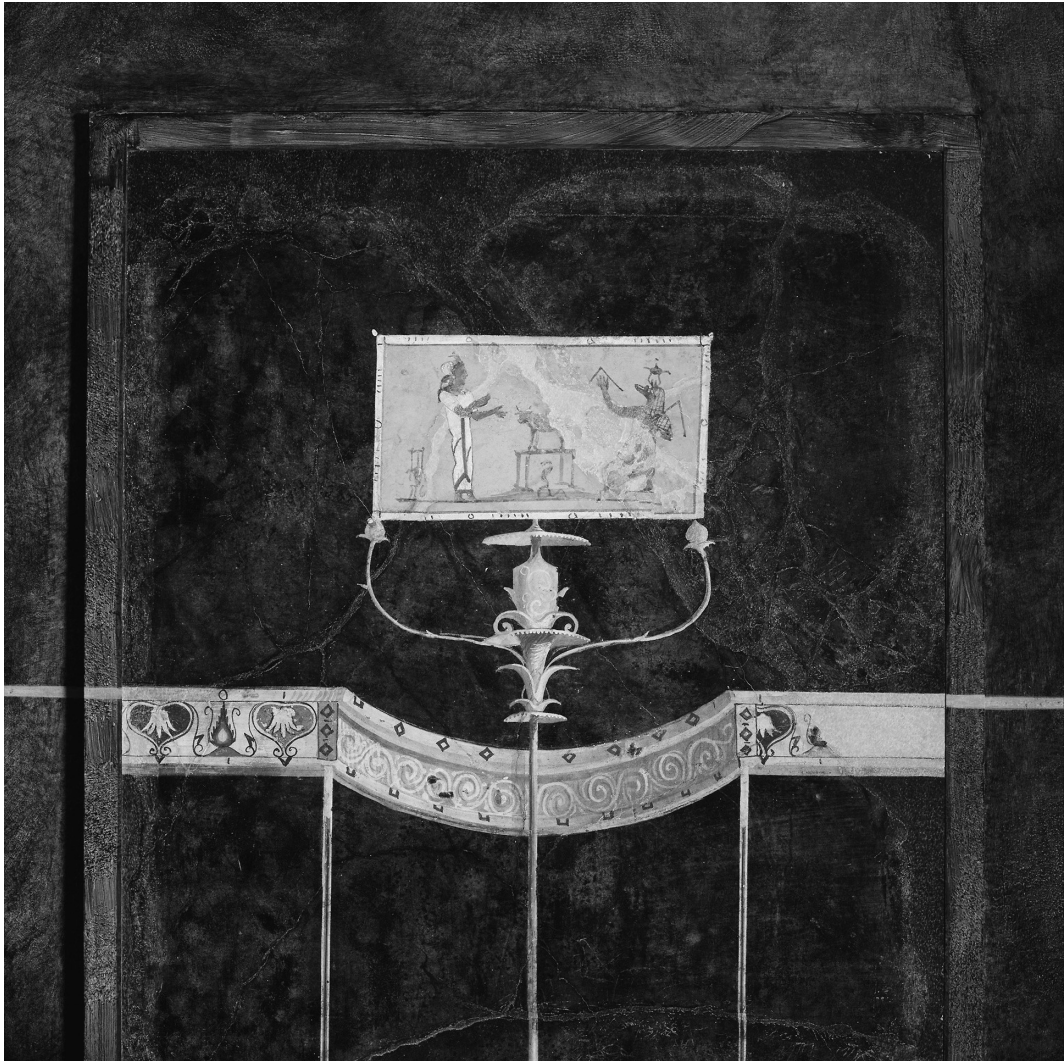


図3 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第15室「黒の間」、小タブロー画（左側）
© The Metropolitan Museum of Art.

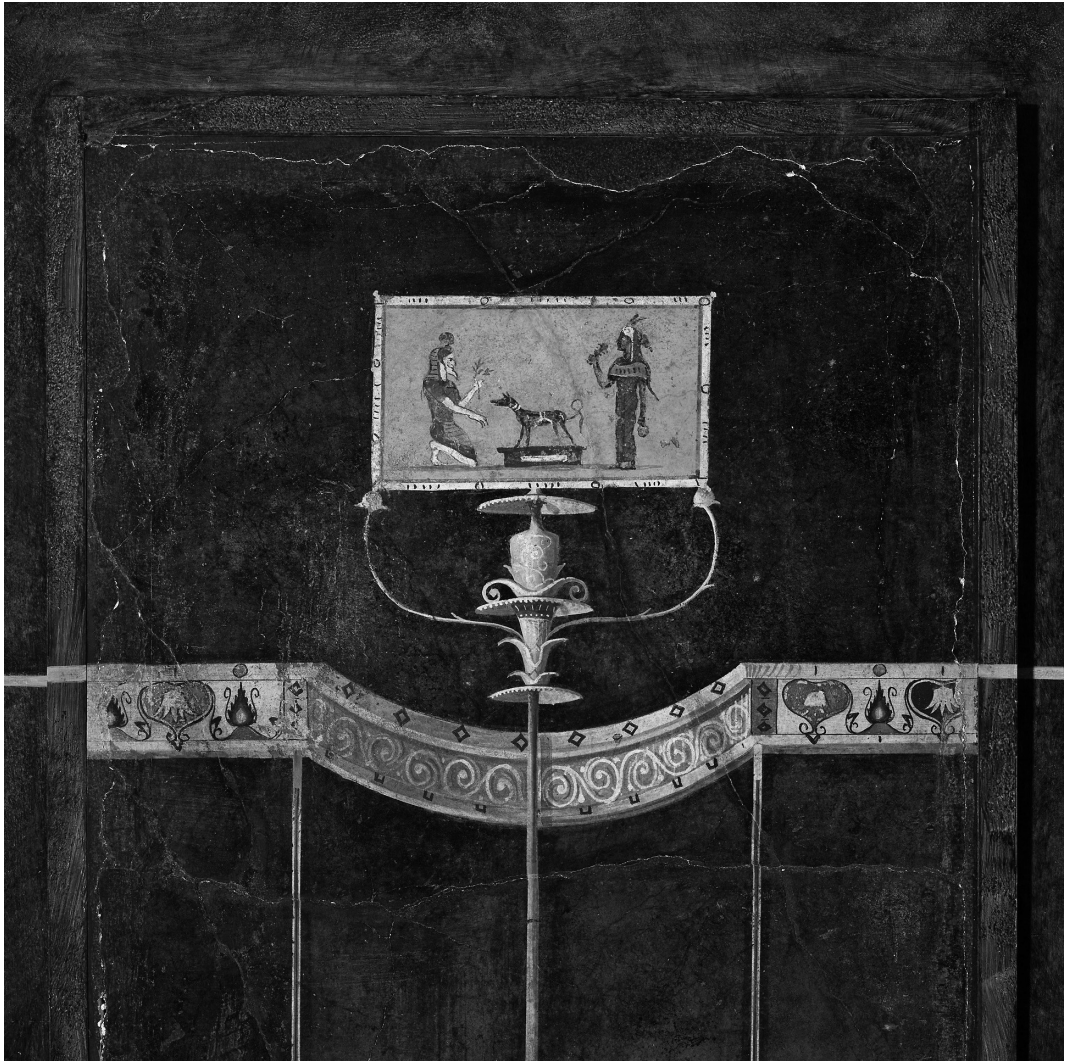


図4 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第15室「黒の間」、小タブロー画（右側）
© The Metropolitan Museum of Art.

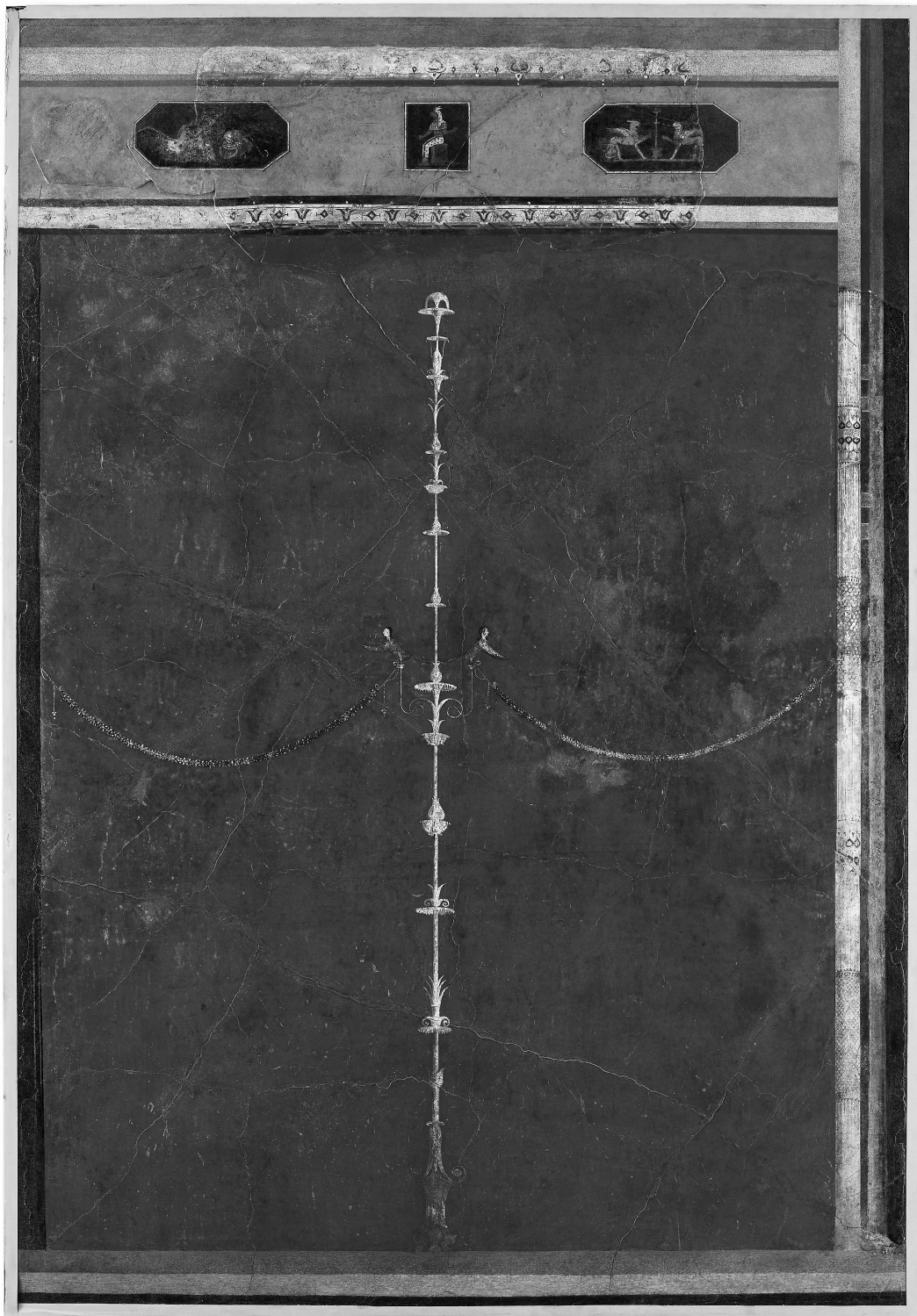


図5 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第19室「神話の間」、赤地パネル
© The Metropolitan Museum of Art.



図6 「アグリッパ・ポストゥムス荘」第19室「神話の間」、壁面中央「ペルセウスとアンドロメダ」© The Metropolitan Museum of Art.